

月夜の浜辺はまべ

中原なか中也はらちゅうや

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打なみうちぎは際にぎ、落ちてゐた。

それを拾ひろつて、役立やくたてようと
僕ぼくは思おもつたわけでもないが
なぜだかそれを捨すてるに忍しのびず
僕ぼくはそれを、袂たもとに入いれた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打なみうちぎは際にぎ、落おちてゐた。

それを拾ひろつて、役立やくたてようと
僕ぼくは思おもつたわけでもないが
月お月に向むかつてそれは抛なれず
浪なみに向むかつてそれは抛なれず
僕ぼくはそれを、袂たもとに入いれた。

月夜の晩に、拾ひろつたボタンは
指先ゆびさきに沁しみみ、心こころに沁しみみた。

月夜の晩に、拾ひろつたボタンは
どうしてそれが、捨すてられようか？

〈出典 『日本の詩歌23 中原中也 伊東静雄 八木重吉』 (中央公論社、一九七四年)〉

【著者】 中原中也 (なかはらちゅうや)

一九〇七 (明治四〇) 年—一九三七 (昭和一二) 年

詩人。山口県の生まれ。

【著書】 『山羊の歌』『在りし日の歌』など